

八月十二日の原爆

— 檀一雄「新カグヤ姫」のはずし方 —

内田 友子

年号や日付を覚えるのが苦手だ。いまだに中高生がナクヨウグイスやイクニツクロウで丸暗記しているかどうか知らないが、数字の数字を機械的に記憶へ埋めていく作業は、味気ない受験勉強の中でもダントツに味気なくて嫌いだっただ。

檀一雄「新カグヤ姫」（『文藝春秋』昭和二十五年十一月）では、長崎に原爆が投下された日付が八月十二日とされている。同病相ヨロコブ。もしや檀一雄も年号を覚えるのが苦手だったか？ それともあえて別の、架空の日付を設定したのだろうか。

たとえば竹西寛子「儀式」（『文芸』昭和三十八年十二月）では、作品中一度も原爆どころか広島という地名さえ明記されない。にもかかわらず、「朝、閃光、轟音、噴煙、突風、火……そこまでは確かに覚えている。そのあと、わたしはどうなっていたのだろうか。」とか、「登美子やわたしたちが育ち、火に追われたあの土地は、登美子が少しもためらわないで言うように、わたしたちのかえって行くところだろうか。あの土地の、何にわたしたしはかえるのだろうか。」といった文により、私たちはああそうかと気づく。

気づかされることは、たぶん、はっきり示されるよりも昭和二十年八月六日という日付を確実に想起させられる。なぜなら、そ

の日付があまねく世間の了解事項としてすでに成立していることが前提にあるからだ。書かずもがな、は言いかえれば、あらかじめ記憶しておくことを私たちに強いている。平安京なら鶯が啼くように、原爆なら八月の六日と九日なのだ。

さて「新カグヤ姫」に話を戻すと、八月十二日という別の日付を堂々と示されたことで、原爆におけるあの日あの時という了解事項はたちまち揺さぶられてしまうのだが、では揺さぶっておいで「新カグヤ姫」は何をしようというのか。

物語の主人公は、「淋病をうつされたって、梅毒をうつされたって、ミジンも困った顔をしない」、可愛いミイ坊だ。

ミイ坊はね、御丁寧に二度まで戦災に遭ったんだ。一度は浅草——で焼け出されて、それから長崎で、あの大変なピカドンに遭っちゃったんだ。

「へえ——ミイ坊は原爆の生き残りかい？」

こちらがそう言ってタマゲでもしようもんなら、かえって当のミイ坊の方がキョトンとして、それから身を揉むように、済まなそうな、悲しいような、淋しいような顔になり、「そうなの——あたい。可笑しいでしょう」

ミイ坊が自嘲的に「可笑しいでしょう」という理由は、生き残った者につきまとう後ろめたさなどといった複雑なものではない。二度までも、月に帰りそこねたせいだ。

東京大空襲のさなか、燃えさかる炎、逃げ惑う人々に囲まれながらミイ坊は「何だかポツカリと自分だけが今の今生れ出してきたような気がし」、「月宮殿からふり落されたカグヤ姫は、なんだ、あたいのことじゃなかったか」と気づいただけでなく、

「こんな騒ぎも、もとはと言えばみんなあたいのためなのに、それを誰も知らないなんて」、「みんなに済まないような、嬉しいような、悲しいような、涙こそ出なかつたけど泣いて折つていてみたいな」気持ちになる。そうこうしているうちに体内はみな焼け死んでしまい、ミイ坊は焼け跡で、「泥棒と闇商人の丁度際とい中間あたりで生きている」怪しげな「おいさん」に拾われ、やがて一緒に長崎へ行く。

でも、十二日。——八月の十二日のことなんだ。素晴らしいお天気だね、(略)

パーッと眼のなか一杯が、くらめくように真白になっちゃって、それから、どういうか、地面の底から、噴き出してくるような物凄い風に吹き飛ばされて、土の上に尻もちをついたから、思わず空を見上げてみると、かみなり雲を何千本もより合せたような、たまげるほどの雲と火柱が噴きあがっていてね、一遍に世界中が、裏返しになってしまったような、シーンと腹の底が、冷え切ってしまうみたいな淋しい気持が湧いてきちゃってね、——ああ、これは何だった、何だった、何だった、そうそう、あたいの、カグヤ姫のお迎えだった、と、気がついて、梅干しの竹づっぱをかかえ、ものもいわず、

ドンドンドンドン町のほうにかけ降りて行ったのさ。

その頃しけたするめを干していた「おいさん」は、「腹の上に、ポックリそのするめとそっくりの斑点がついていて、あとの皮膚がウデ蛸みたいに変わっている」という姿で数歩よろけた後、ミイ坊が見ている前でバタリと倒れ、体じゅうの穴という穴から血を噴いて息絶える。

再び独りになったミイ坊は、「日本が敗けたつていうけど何処がいったいどういうふう敗けたんだか、ちつともわかんなくて」、東京へ戻る汽車の中から焼け果てた街を眺め送りながら、日本中の人達が可哀想だね、何故つてこの人達知らないんだもの——、この騒ぎが、みんなあたいのお迎いに、お月様が一生懸命になつていらつしやるのを、——いつもちよつとばかりあたいがはずしてしまうもんだから、お月様のお迎いの人達もとまどつて、あせつて、何処もかしこもこんな無惨なていたらくになつちやつたに違いないんだもの——。

原爆の閃光を月からのお迎えの神々しい光に見立てる感覚は、空襲の炎でさんざんに干からびたお母さんを凧にして空へ舞い上げようという発想と同じくらいファンタスティックと言えばファンタスティック、しかし大胆と言えば大胆だ。ちなみに「婦人公論」で野坂昭如の戦争童話が連載されていたのは昭和四十六年のことだ。戦争を知らない世代が社会人として世に出始め、戦争体験の記憶の仕方、語られ方が見直されていた頃だといつていい。ではそこから二十年バックして「新カグヤ姫」が発表された昭和二十五年。戦争を知らないとは言わせない世代の人々は、(原爆)をどのように捉えていたのだろうか。

二十四年一月、永井隆『長崎の鐘』(日比谷出版)が刊行される。これが火付け役を務めたのか、同年五月二十八日の朝日新聞では次のように「記録文学全盛時代」の到来が報じられている。

このごろから群書を圧倒しはじめた記録物は永井隆博士の数の原爆物がいづれも各五万部台を突破し、この子を残して、などは三十万部に達しようとしている、他各種抑留物や

記録ものが異常な売行きを示して来た、そこで出版社のほとんどがこの種実録物を争って刊行するようになり、この傾向は雑誌にも飛火しどんな雑誌でも必ず一つは実話物、記録物を載せているのが現状

原爆に関する記録——ことに個々人の体験に忠実な記録を読むには事欠かなかつたらしい。しかし一方で、この頃にはまだ「アサヒグラフ」による原爆被害の特集も、山端庸介撮影・北島宗人編集の記録写真『原爆の長崎』も出現していないので（ともに昭和二十七年八月の出版）、国内において原爆被害の全容を視覚的に、俯瞰的に確認する機会が果たしてどの程度許されていたか。さらには二十四年八月七日、「広島平和祭」のことを報じる東京新聞には次のような言及が見られる（傍線内田）。

ちようど四年前、目もくらむ真白なせん光一陣の突風、物すごい熱気のさく烈、人類はじまつて以来の大爆音が、世界の最初の原子爆弾の爆発を告げ、当時の死者は実に老若男女七万八千人に上つたが（中略）広島市民は六年近くも文明社会の人と物を浪費しつつあつた戦火の波が、巨大な原子核破壊の新しい力によつてのみ消し止められると決断した人達に對しては、悪感情をもつていない、六日朝、原子爆弾の生存者たちは、厳肅な面持でまだ当時そのまま一木一草もない爆心地に立ち、爆弾の投下されたと同じ午前八時十四分キツカリに、一分間の黙とうをささげた、

「広島市民は…悪感情をもつていない」というあたりのくだりは、たとえば前年に大田洋子が『屍の街』（中央公論社）を出版するにあたってかなり大幅な内容削除を強いられ、のちのちまで憤つて

いたことなどを考え合わせると、この記事にもGHQによるプレスコードの影響を感じないわけにはいかない——「広島市民」は悪感情を持たないが、たぶん、好感情はもつと持つていなかつたと思うがどうだろう。

ともかくこのように、戦争を体験していたり知つていたりするのだけど、なんとなくものが言いつらい、本音のありかが杳としてわからない、今日から見れば甚だもどかしい時代に、ファンタスティックかつ大胆な「新カグヤ姫」は発表された。そこで、さぞかし読者がまごついたのではと懸念した（のかもしれない）浅見淵は、次のようにこの作品の味わい方を指南している（『新選現代日本文学全集26 檀一雄集』（筑摩書房、昭和三十五年）の「解説」より）。

作者がこの作品を執筆した頃は、敗戦後の大混乱の余燼がまだくすぼつて残つていた時代である。作者はその雰囲気身を置いて、戦災孤児の少女をきょうのカグヤ姫に仕立てて、その童話化によつて取材の深刻さをゆるめ、戦災の惨状や、長崎のピカドン、終戦前後の買出し騒ぎ、さては敗戦後の復員騒ぎやパンパンの氾濫、そういった連鎖反应的な異常風景を叙述しているのである。中で、当時作者は九州にいただけに、長崎に原爆が落ちた時の印象は鮮やかである。また、作者は大観して、むしろ異常さを面白がつて眺めているので、こういう題材に付き纏い勝ちの暗鬱さが無く、読者を吻つとさせてくれる。

それなら八月十二日という日付の説明もつく。「こういう題材に付き纏い勝ちの暗鬱さ」から作品を解放し、純粋にファンタジ

ーの世界へ、架空の（長崎）へ読者をいざなうため、わざとはずしたのだ。

なあんだ、そうだったのか。——と、うっかり吻つとさせられてしまいそうになるが、その前に、せつかくなのでもう少しこの作品を掘り返してみたい。

「おいさん」と死に別れて单身東京へ戻ってからは、浅見淵の「解説」にもあるように、ミイ坊はいわゆる「パンパン」として街に立ち生計を立てる。

ほんとうだよ。ミイ坊はまったくのカグヤ姫なんだ。誰だってミイ坊を抱いていると、唇の奥の方で、それから二つの乳房の奥の方で、それから可愛いあそここのところの奥の方で、いやいや体全体、青色ネオンのように、月光のように、何か金色の光りもののように、ポーツと透いてきて、輝いて見えてくる放射光線のようなもののあることに気がつくだろう。

泊めた復員兵たちから家の中のめぼしいものを根こそぎ盗まれたりもするが、そのうち「東京の街はもうジープが走り始め」、「新宿の町はだんだん明るくなり賑やかになって」、「灯がつき、ネオンがつき、みんなが踊り出し、みんながお酒を飲みはじめ、頃から、もう人ごとには眺められなく」て、「毎夜、毎夜お友達を誘ってきて」、とうとう「お部屋も大改造」するほどにミイ坊の仕事は繁盛する。ところがある日「カリコミ」に会い、あつさり捕らえられたミイ坊は、くわえ煙草の姉さんたちと一緒にトラックで病院に送り込まれてしまう。

ひどい侮辱みたいでね、ペンキのはげた腰掛けに坐らせられるとその椅子が自動的にガチャーンと開いたりしてね、ミ

イ坊の光り物のする大事な大事な奥の方が、日光の中にむき出しにさらされるような気がしてね、ミイ坊はカツとのぼせ上るともう何も答えなかったのさ。

名前をきかれても、「あたいたい、カグヤ姫」何をきかれても、「カグヤ姫を馬鹿にするの？　もうすぐお月様からお迎えがくるんだよ」

と答えるばかりで、白衣の品のないお医者さんも、お巡りもすつかり手をやいて、

「もう大分、きているようですよ」

何だかそんないやいな肯き合いをしているんだよ。

さてここで、「面白がつて眺めて」ばかりはいられないような、なんとなく「新カグヤ姫」の童話性にすこしかげりが見え始めたような、そんな雲行きを感じないだろうか。

精神障害のひとつに誇大妄想という症状がある。その症例として、三宅鑑一「精神病学提要」（南江堂、昭和二十二年）では「葦原將軍」が写真入で紹介されている。

己ノ位置・境遇・資産・体力・才能・学才等凡ソ皆事実以上二大ク確信スル妄想ヲ誇大妄想（略）ト名ヅク、帝王・將軍・富豪・英傑ト自称スルノ類是ナリ

不鮮明な写真の中、仁王立ちする男性——キャプションには「誇大妄想ヲ有スル患者ニシテ自ら葦原將軍ト称シ、自作ノ大砲ニテ襲ヒ来シ敵軍ヲ攻撃セントスルノ図」とある。ちなみにこの葦原將軍、本名は葦原金次郎といつて、嘉永三年（一八五〇年）高岡藩士の三男として生まれ、櫛問屋に弟子入りするも間もなく発症して入院。自分で葦原將軍と名のり、あたかも皇帝のように「お

言葉」を述べ、謁見料を取って見物者に拝謁させた。その収入で買った牛乳や果物を患者仲間配って部下とし、病院内でボスの存在であったそうだ(『精神医学事典』弘文堂、昭和五十年)。

さて、空襲の炎や原爆の閃光を月からのお迎えのサインだと信じ、「あたいたい、カグヤ姫」と何の疑いもなく言い放つミイ坊を、一転、ファンタジーの外の世界へ置いてみるとうどうだろう。

先の『精神病学提要』では妄想の発病原因のひとつとして「脳黴毒」が挙げられている。「黴毒性脳疾患ニハ意識濁濁ヲ示サズシテ唯、妄想形式ノミヲ主トスル妄想病様状態ト、幻覚ヲ伴ナフ型トアリ」と説明され、梅毒に対する昭和二十年代の認識がうかがえる。これを踏まえると「新カグヤ姫」の冒頭でミイ坊が「梅毒をうつされたって」云々と紹介されるのは、ラストの「もう大分、きているようすなあ」という医者言葉へじんわりとつながっていく伏線だと見ることもできる。

「新カグヤ姫」は、ミイ坊が東京空襲や長崎原爆を生き延びつつカグヤ姫であるという自覚に目覚めていく物語だが、作品全体の構成からすれば、夜な夜な街角に立つ現在のミイ坊の回想としてそれは展開される。だとすれば、語られてきた一切合財がもしかすると誇大妄想という病の所産なのでは、という疑惑も出てくる。こうなつてくると、精神病院で医者と患者の立場が転倒してしまうチェーホフの「六号室」よろしく、屈託ないファンタジーだったはずのわたしたちの足場はたちまちはずされてしまうだろう。この作品は、「童話化によって取材の深刻さをゆるめ」るところかますます救いのない暗い方向へと状況をねじ込んでいるのかも知れない。その点では、たとえば井伏・二「遥拝隊長」(「展

望」昭和二十五年二月)の世界とよく似ている。のん気に吻つとしている場合ではない。

さて、病院からミイ坊が逃げ出したのは五月一日だ。

やっばり。お出迎え。何万人の行列。先頭は赤い旗をおし立てて、それから後ろはみんな肩と肩と組み合つて、よくききとれないが、みんな声をそろえてあのお出迎えの歌みたいな歌を大声でわめき合っているだろう。お月様の舞臺にしては少しばつかり、ガサツなような気もしたけど、(略)今度の行列におつことされたら、もういつ迄たつても月世界には帰れないとそう思つて、(略)ミイ坊は全く天に昇る心地で、その宮使いの女達としつかり肩を組んで、はだしのまんま歩いてゆく。

この行列がわめいていたのは「コメヨコセ——」「シヨクヨコセ——」、つまりミイ坊が飛び込んだのはメーデーのデモ行進だったのだ。その点で「五月一日」という日付ははずされていない。最後は棍棒を持った警官がデモ隊に乱入してもみあいになり、その真つただ中でミイ坊はつき倒され、踏まれ、もみくたにされる。

空の中間っぱい、あの真白な光りものがパーツと拡がり、それこそ本当に月のお出迎えの樂の音がきこえてきて——新しいカグヤ姫はまっすぐ、月の世界の方に帰つていったんだとさ——

……さて、残念ながら、檀一雄だつて年号や日付を覚えるのは苦手だつたのだとカチドキをあげるわけには、どうやらいかなくなつてしまった。パンパンのミイ坊にとつての原爆は、あの原爆とは違う。日付は、はずされるべくしてはずされたのだ。とする

と、どうして十日でも十一日でもなく、十二日なの？ と悩む向
きもあるだろうが、——はずし方にそこまで正当な理由を求める

のは、それこそダントツに味気ないと思うがこれ如何。
* 引用文は適宜、新字体、現代かなづかいに改めている。